

禪宗というのは禪定(ぜんじょう)、坐禪をもっぱらとする宗旨です。禪はインドで仏教以前から行われてきた修行で、釈尊もこれを修行法として取り入れられました。そこで八正道の中に正定(しょうじょう)、六度の菩薩行の中にも禪定(ぜんじょう)という項目が入っています。

ですから、禪は本来、宗名ではなく、修行の名称であったのですが、今日、禪宗とよばれる宗派は、北魏末に中国に南インドの僧、菩提達摩(ぼだいだるま)が到来、一宗として独立させました。そして唐より宋代にかけて臨済(りんざい)・曹洞(そうとう)・い仰 (いぎょう い＝さんずいに為)・雲門(うんもん)・法眼(ほうげん)の五家が分れ、さらに臨済から黄竜(おうりゅう)・楊岐(ようぎ)の二派が出たのを合して五家七宗と呼びました。

日本では、栄西(ようさい) (1141―1215) が1168年と1187年に二度にわたり宋朝の中国に入り天台山や天童山で禪を学び1191年に日本臨済宗を開宗し、「興禪護国論(こうぜんごこくろん)」を著しました。

また、道元(どうげん・・・1200―1253)も栄西の高弟である明全に建仁寺において師事し、後、貞応2年(1223年)に入宋して天童山の長翁如淨に曹洞禪を学び、嘉祿3年(1227年)に帰朝、建仁寺において「普勸坐禪儀(ふかんざぜんぎ)」を著し、その後、1234年に宇治に興聖宝林禪寺(こうしょうほうりんぜんじ)を開き、教団を開創しました。後に寄進を受けて永平寺を越前に建立して日本曹洞宗の第一の道場としました。また、「正法眼蔵」を著述して難解な哲学を展開しました。

禪宗はたとえそれが釈尊の言葉であり、真実の經典であっても、およそ文字として残されているものは用いない、教えの他に別に伝えている仏心を師の心から弟子の心へと以心伝心で伝えていくのであるということです。これを教外別伝(きょうげべちでん)・不立文字(ふりゅうもんじ)といいます。いわば、仏語によらず自分の心中にある仏心を見つめよと言うのですが、これも禪宗の各派によって程度の差異があって、ある派では楞伽經(りょうがきょう)や維摩經(ゆいまぎょう)などの經典を重んじたり般若經(はんにゃぎょう)、華嚴經(けごんぎょう)、円覚經(えんがくきょう)、首楞嚴經(しゅりょうごんきょう)を用い、あるいは道元のように臨終の時は法華經を読誦したりということがあるようです。また、言葉など要らないと言っているのに、名の知られた禪宗の坊さんが残した語録というものは用いているのは矛盾しています。

語録の中には、有名な「仏に会はば仏を殺せ。祖師に会はば祖師を殺せ」という過激な言葉が残されていますが、これは慢心も甚だしいと言わなくてはなりません。

この点を御祖師様は「禪は天魔の所為」「禪天魔」とお折伏されたのです。

故最明寺入道に向て禪宗は天魔のそい(所為)なるべし。のちに勘文もてこれをつげしらしむ。日本国の人皆無間地獄に墮べし。これほど有事を正直に申ものは先代にもありがたくこそ、これをもん(以)て推察あるべし。

(法門可被申様之事 昭定

620頁)

と仰せです。

御祖師様はもっぱら經文の上の証拠によりつつ、その宗義を展開されています。今日では、中国撰述の偽經や仏滅後千年以上経って突如現れた真言經典など怪しげな經典もありますので、注意しなくてはならないことは事実です。だからこそ、いったいどの經典が釈尊の真意を伝えているのかという教判が求められるのです。そうして天台大師が苦心の上、ふるいにかけて抽出したのが法華經です。まったく、そういう手続きを踏まずに、最初から不立文字というのは、やはり仏教の否定に他ならないのです。

さらにまた、禪宗では直指人心(じきしにんしん)、見性成仏(けんしょうじょうぶつ)といって、一人一人がじかに自己の心を注視して、ありのままの心の本性をを觀察し把握する、それによって悟りを開いて成仏するということです。人の心は本来清淨であり、皆平等な仏性をそなえているのですから、この仏性を徹見すれば成仏するというのです。

御祖師様は、これはまったく不可能であるとされています。私達凡夫が、自らの心の内面を觀察して、そこに清淨な仏性を発見できれば問題はないのですが、そうなる前に煩惱が覆いふさがり、慢心が心の中で増幅したり精神障害を起こしてしまうことだってあるのです。心臓や脳など、自分で自分の体を手術できないように、自分の心を自分で改造しようとしても失敗してしまうのです。自己の心中に仏性を発見できるのは、ごく限られた高位の聖者に限り、末法の時代にはそんな人はいないと御祖師様は断言されています。

今日、日本の禪宗は曹洞宗、臨済宗、黄檗宗(おうばくしゅう)の三宗に大別されており、それぞれ教義が異なります。